

一般誌の横暴？

「週刊現代」のA I 記事について 大槻教授との電話インタビューを基に



(株)ピーピーキューシー研究所
加藤宏光

講談社から発行された週刊誌『週刊現代』（平成十九年二月十九日―三月三日号）に、「鳥インフルエンザの闇ワクチン蔓延を警告する（副題…こんなことで鶏肉と鶏卵を食べて安全なのか）」と題して、京都産業大学教授、大槻公一博士の意見という設定での鳥インフルエンザに関する記事が掲載された。

これに先立ち、『週刊新潮』（二月十五日号）においても、今年一月、宮崎県のプロイラー種鶏場をはじめとして合計四件発生した鳥インフルエンザに関する特集があった。この特集記事の内容にも「問題なし」としない点があるが、今回の週刊現代の記事は、家さん疾病小委員会のメンバーとして、わが国の鳥インフルエンザへの対応に大きな影響力を持つ大槻教授の意見を取り上げているだけに、一般読者への影響は極めて大きいと言わざるを得ない。

著者は、こうした事情を踏まえて、この記事の内容を詳細に検証してみた。その結果、種々の問題点が浮き上がり、これらの諸点でかねて親交の厚い大槻教授の持論と大きな乖離があることに注目した。

これらを検証するため、早速大槻

教授に電話インタビューを試みた。その結果、この記事において「私の発言とはまったく異なる事柄がいかに私の意見という形をとって掲載されている。これは本意というレベルを超えて、業界や大学の名誉を毀損するものであることから、厳重に抗議すべく、現在大学と協議中であり、場合によっては裁判も辞さない」という言葉を待た。

業界にとつても見逃すことのできない問題として、まず、著者の記事分析とその経過に対する所感を述べた上で、大槻教授とのインタビューの内容を紹介し、この問題による消費者への悪影響を回避する道の模索に役立てたい。

なお、この電話インタビューに際して、ある若手生産者の農場から、農場主の臨席の上で電話することにより、その公平性を確保するように配慮したことを併記する。

《記事の問題点》

まず記事の概要を、以下に抄訳する。

- ① センセーショナルなタイトル
- ② ベトナムやインドシナで死者が多

数出ているが、日本で出ていないのは運がよかっただけ

③記者の記述として、「大槻教授が今そこにある危機」を警告する、と煽る

④闇ワクチンに言及。その中で不活化、生ワクチンがあることを解説し、生ワクチンが長くニワトリの体内に生き残るため危険と説明

⑤ワクチン使用で、不顕性感染が生ずることを解説(ワクチンと記述する文脈から、この時点でのワクチンは生ワクチンを示すと判断できる)

⑥「闇ワクチンが生む新型ウィルス」との中見出し(何とか新型インフルエンザに持って行きたい意向が見える)

⑦《国が認可する不活化ワクチンは発生後の周辺地域のみで使用許可され、予防のための使用が許されていない。そのため業者は闇ワクチン使用に頼ってしまうのではないか》との記述で完全に馬脚が現れている。不活化ワクチン使用が許されているといった、こんな稚拙なストーリーを、鳥インフルエンザへの対応に必死の大槻教授がするわけがない

⑧闇ワクチン使用の疑いがあつてから、ウィルス蔓延は県内各地に伝播し、さらに埼玉県にまで広がった(このくだりも、茨城県のH5N2タイプA1の発生、発覚の時系列を知らない人間が記述していることは明白、大槻教授がこうした間違いを解説するわけもない)

⑨新型インフルエンザの恐怖を厚生労働省の試算を取り上げて解説

⑩不活化ワクチンを使用した場合のアジユバント残留問題と出荷制限を取り上げる(ここでは闇ワクチンが不活化ワクチンにすり替わっている)

⑪この(闇ワクチンの)危険性と行政の姿勢を批判

⑫養鶏業界団体を紹介し、(社)日本養鶏協会は養鶏生産の四割でワクチン使用を唱える、六割はブロイラーを扱う(社)日本食鳥協会でワクチンを接種しないとすると記述

⑬日本養鶏協会のある会員は海外から(認可された)ワクチンを輸入している会社の社長を務めている、と解説し、さらに、目先の利益を追いかけて過ぎて、将来の産業全体を見ていない、消費者のことを考えていない、と論説を進める

⑭茨城県の話に戻り、農林水産大臣への政治献金問題に触れる(ワクチン推進派が利権を前提としているかのような展開手法)

⑮発生に対しては殺処分が原則、新型インフルエンザ抑制に対してと強調し、闇ワクチン使用の否定は当然で、ワクチン使用に反対と結ぶ

参考までに、先述した週刊新潮の記事についても、そのタイトルのみを列挙する。

●特集「『今年は危ない』と専門家が警告する『鳥インフルエンザ』」

◎「新型インフルエンザ」発生なら「死者二一〇万人」

◎「足りない新型ワクチン」厚労省通達で「高齢者は後回し!」

◎ワクチンなき「一億二〇〇〇万人」は自宅に「二週間こもる」しかない

◎使わない「危険な鳥ワクチン」八二〇万羽分を「大量備蓄」する農水省

◎「七〇億円市場」鳥ワクチンに今年一月「製造承認」が下りていた

◎「松岡農水相」に「一五〇〇万円」巨額献金した大手業者
こうした中見出しで五ページにわたる特集が組まれていた。今年一月に発生したH5N1は、新型インフルエンザへの警告として世界、世論が騒然としている最中でのことであり、一般誌が格好のトピックと狙っていたテーマであろう。昨年のバイオテロを示唆する特集記事と併せて、この記事でも、匿名の養鶏業者の話として亀井氏や農相を槍玉にあげる手口は、経過を知るものとしては「またか」の感を否めないが、一般読者を対象とする競合他誌の印象が「やられた!!」といったものであろうことは容易に想像される。

こうした条件の下で、大槻教授の発言という形式で公開された週刊現代の記事について、先に箇条書きした各項別を、大槻教授に確認した内容を以下に記述する。

《大槻教授との対話》

以降、K〓著者、O〓大槻教授

「タイトルについて」

K このタイトルは、読者に養鶏生産品の安全に対する信用を失墜させる印象を与えますが、タイトルについての連絡はありましたか?

O まったくなかった。こんなタイトルでの記事の公開を認めるわけが

ない。

「死者が出なかったのは運がよかった」

K 先生は常々「日本と深刻な被害が出ているアジアの国々では生活の場における人と鶏の接触形態が異なる。庭先養鶏が少なく、生鳥市場のないわが国で、他のアジアの国々におけるような人死問題への展開の可能性は極めて少ない」とおっしゃっていました。この文段では「単純な運の問題」とされていますが…。

O 私はかねがね、日本の鶏の飼養形態と清潔好きが、防疫には優れた特性として働いていると思っています。不幸にして死者が多数発現する国々では、日本と違った密度の濃い鶏との接触が日常的にある。この差異は、人への感染のリスクを考えると極めて大きい。「単純に運がよいから日本での人の感染がない」などとは思ったこともない。

「闇ワクチンについて」

K ワクチンについての解説は？

O ワクチンのメカニズムは説明した。

「闇ワクチンから新型インフルエンザが生じる」

K 闇ワクチンとは生ワクチンを指

しているのですが、闇ワクチン使用の可能性についての発言や、これを使用した野外から新型インフルエンザへ発展する可能性について話をしたことは？

O 闇ワクチンの使用に直接触れる話はしていない。ただ、分離されたウイルス(H5N2)の性状は、《鶏によく馴化されたもののようで人の手が加わっていないとこうした性格のウイルスは生まれにくい》と解説しました。このとき、生ワクチンのような株というような言葉は出たと思う。しかし、《このウイルスが体内にいつまでも残る》といったことには触れていないし、《これ(茨城県のH5N2)から新型インフルエンザウイルスが生まれる》という発想は自分ではするはずがない。考えないことは発言するわけがない。

「不活化ワクチンは、発生周辺への使用を国が認めているが、生ワクチンの使用は認めていない(現実の行政では、現時点で鳥インフルエンザワクチンの使用は一切認めていないことは、養鶏産業に携わる者なら誰でも知っている事実であり、その行政の姿勢に悩まされているのが現状である」(著者注)」

K 国の鳥インフルエンザワクチン使用に関して根本的に間違いがある発言になっているが…。

O 先ほどの矛盾にさらに輪をかけた大きな間違いだ。基本的な国のワクチン行政を理解していない人間でなければ、こうした根本的な誤りを犯さない。私は、ワクチン使用に関して議論する立場で、このような不自然な発言をするはずがない。

「闇ワクチン使用の疑いからウイルス蔓延」

K 質問する方が、あまりの矛盾に質問を躊躇するのですが、この項については…。

O 時系列の発生状況は、十分に私の頭に入っているし、闇ワクチン使用の疑いの後でそれ(闇ワクチンウイルス)が蔓延したというように、伝播の原因と結果が明確なら茨城県のA1問題の解明は容易なはず。現実には、《汚染が次々に明らかにになり、その結果を踏まえての疫学調査で原因を推測しようとした》ということだ。闇ワクチン使用という仮定を前提としてストーリーを組み上げて原因究明することは、先入観が結果を左右することになり、科学者としてとるべき姿勢ではない。分離さ

れたウイルスの性格が本来のものと大きく異なり《水鳥(アヒル)に対してより鶏への感染能力の方が高いこと》等から、《何度も鶏で継代する》といった人為的な操作が加わったウイルスと推測される、と解説したまでである。

「闇ワクチンと行政の姿勢」

K 闇ワクチンを前提として、行政の姿勢を批判した？

O 闇ワクチン使用の現実に対して、触れていないのだから、行政姿勢については触れるはずがない。

「養鶏生産者団体について」

K 生産者団体が採卵業界とブロイラー産業で別であり、ワクチン要望は採卵業界で強いことについては？

O これまで、ブロイラー産業サイドではワクチン使用というより、鳥インフルエンザ問題そのものに対して積極的でなかったこと、ブロイラーでは飼育期間が短いためワクチン使用は馴染まないことは説明した。また、採卵業界では緊急時のリングワクチンや予防的なワクチン使用許可への要望が強いことは説明した。

「日本養鶏協会の会員の中で海外からワクチン輸入している者がある」
K こうした事実についての言及は？

O 記者側からしつこい追求があった。ワクチン輸入許可を得た業者の名前等、事実を追認する程度の話があった。

「農相への献金問題」

K 献金問題への発言は？

O 『異なる世界の問題については、私はわからない』と答えた。こうした問題は、私の理解できる世界ではなく、話ができるはずもない。

K 大変な状況の中、貴重な時間をいただき、ありがとうございます。

この電話インタビューを通じて感じたのは、一般誌間のライバル意識が何らかの影響を与えたのではないか、という点である。

週刊現代の記事を詳しく読んだ印象では、『大槻教授の警告』という形をとらなければ、後発記事でもあり一般読者へのアピール度合いが低いと評価される内容である。こうした事情が、いかにも大問題であるかの装いであるタイトル「鳥インフルエンザの闇ワクチン蔓延を警告する」(副題:「こんなことで鶏肉と鶏卵を食べて安全なのか」)といった表現に現れたのではないか。

《無責任な記者の態度

—同号の記事と比較して—

すでにマスコミで大々的に報じられている「大相撲の八百長事件」が週刊現代の同じ号に取り上げられている。この記事は、すでに日本相撲協会が「これまでの記事と異なり、現役横綱が名指しで取り上げられている」ことも相まって、民事告訴している。(考えてみれば、裁判になることで世間の耳目をより集められることは、販売部数こそが命の雑誌

業界では思う壺なのかもしれない)

しかし、この記事と鳥インフルエンザ記事との基本的な差異は、前者では、武田頼政氏(ノンフィクションライターとある)がすべての責任を負う人間として名前を公表しているのに対して、問題の記事はライターの名前は伏せられ、大槻教授の意見としてのみ開示されていることにある。この記事の内容と取り扱いならば、当然、大槻教授からのクレームは当初から意識にあったことは容易に想像がつく。著者は教授に、取材の記者に証拠として経緯の一部始終を録音したレコーダーの提出を求めるように具申した。ところが、くだんの記者は、そういったレコーダーを持っておらず筆記するのみであった、とのことである。

新聞、雑誌の記者は、真実を極力そのまま読者に伝えることを目的として、取材時には筆記のみでなく、レコーダーを併用されるであろう。著者も種々のインタビューを試みるが、あえて証拠を残すべきでない、と判断する特別なケース以外では必ずレコーダーを併用する。事後にレコーダーを聞くことによって、インタビュー時の聞き違いや思い違いを

見つけて、冷や汗三斗ものであったことも一度や二度ではない。まして読者の多い、一般誌の記者がこれをわきまえていないはずはない。とすれば、レコーダーを使わない理由はただ一つ、「言った言わないは、レコーダーさえなければ水かけ論に持ち込める」と読んだ、確信犯である、と断じざるを得ない。

もし、今回の問題記事が、記者の責任で記述された、記者自身もしくは編集責任者の名前で公開されたものであるとすれば、記事内容の是非はともかく、言論の自由を前提としての建前については理解の方法もあろう。しかし、誤解を前提として危機感を煽ることで消費者の目を集めようとする、この記事の全責任を善意的サイエンティストとして、誠心誠意インタビューに答えた大槻教授に被せようとする、この雑誌の姑息な姿勢は、言論の自由という錦の御旗の影に隠れて、利益のみを追求する悪い意味でのマスコミの代表として糾弾されねばならない。